

町議会県外事務調査は、9月27日～29日の日程で、大阪府貝塚市の農事組合法人「ほの字の里」と徳島県上勝町の高齢者福祉産業「彩事業」を研修しました。

「ほの字の里」は、小学校の廃校を利用した農・林業体験型の研修・交流施設で、「彩事業」は、紅葉、柿、南天などの料理のつまものにする材料を商品として販売し、女性や高齢者のやりがい興しにつながっています。

■「ほの字の里」

大阪府貝塚市は、臨海エリア、市街地エリア、山間エリアの三つのエリアに分けられ、「ほの字の里」は、その中の山間エリアに位置し、平成10年3月



ほの字の里の本館と宿泊施設

に地元の蕎原そばら小学校の廃校に伴ない、グラウンド、体育館、プール、倉庫等は再利用し、宿泊棟、温泉棟を新設し、林業・農業体験型研修・交流施設として林業構造改善事業で整備されたものです。

三つの集落から児童が学校に通い、廃校前は学級数3クラス、児童数20名でした。125年の伝統を持つ小学校で、地域のシンボリックな存在であり、住民の心の寄り処であったため、廃校となる際には強い反対があり、地元住民と十分な話し合いがなされました。そのため、小学校の面影を残した施設として、運営においても地元で農事組合法人を組織し、地域の協力のもと進められていて、地元住民の雇用創出や地域の活性化に寄与しています。

年間利用者は、平成16年度で14万2千人、うち宿泊者数は3400人となっています。施設内には、温泉の他にレストラン、

ガーデンテラス、炭焼き小屋、ミニアスレチックなどがあり、名前のごとくほのぼのとし、ゆったりとした気持ちにさせてくれる憩いの場所でもありました。

■上勝町「彩事業」

上勝町は、徳島県の中央やや南東よりに位置し、県庁所在地の徳島市から40kmのところにある山間の四国で一番小さな町です。人口約2200人、高齢化率44%の過疎と高齢化が同時に進行している町です。

研修では、当時農協職員でこの彩事業の取り組みをはじめ、現在、町の第3セクター(株)いろどりの副社長である横石氏から直接話をうかがうことができました。

上勝町は、以前から温州みかん、花木の産地でしたが、異常寒波で大打撃を受け、それに代わる新しい産業としてこれらの小枝が料亭などの盛りつけ飾りに重宝されているという情報を得て、昭和61年から試験的に取り組みはじめました。女性や高齢者でも容易に生産に携わることができるところから、生産設備に大きな投資をすることなく地域に残った人たちだけでも十分対応可能です。当初は年間100万円程度だった出荷額も、現在177名、平均

年齢68歳の生産者で、年間2億円の規模にまで成長してきています。

このつまものは、JAを通じて京阪神や首都圏の市場に出荷されていますが、防災無線、FAX、パソコンを通じて、多品種の品物をタイミング良く、急な発注にも対応できるような体制作りを行っています。

現在、寝たきりの老人はたった2人で、お年寄りにとっては、この葉っぱ集めが生きがいとなっており、収入と健康な老後生活に自信を与える産業を興すことが福祉の向上にもつながっているとと言えます。



上勝町での研修風景